

地域と学ぶ

山形大学地域教育文化学部

昨年12月18日、「学びを問いつけて」を主題に、やまがた教員養成シンポジウムを開催しました。この一環として、高校生と大学生の合同ゼミを行いました。写真は、12月10日のゼミの場面です。このグループが議論していたのは基礎学力でした。「わかる」ためには、まず基礎が「できる」ことが先だとよく言われます。しかし、テキストには、「『基礎的技能ができる』と『このこと』、『それが基礎的である』とわかる『こと』とは一体となっているはずのもの」とあります。これはどういったことなのか？

教育学・社会科教育 江間 史明 教授

やってくる。その限界を超えてくると、基礎部分に戻り、なぜ跳べなかったのかを理解し、その繰り返しで自分の可能性を広げていく。一方、大学生は吹奏楽を例に言います。「ブレス・トレーニングとかそういう基礎を二つ二つ積み上げて(中略)『できる』ようになるって初めて『あつ、基礎って大切なんだ』と思ふその過程のこと」
彼らは、部活動という文脈を共有しつつ、自分なりの経験に照らして、「できる」と「わかる」の補完関係を対話していました。基礎は、積み上げると同時に戻るものでもあります。この企画は、筆者と、森田智幸、樋渡美千代両准教授のチームで行いました。この企画の背景は二つあります。一つは、2月14日に示された次期学習指導要領案の目指す「学び」の質の

高校、大学生の合同ゼミ



▽1960年生まれ、静岡県出身。山形大着任は96年。

高度化についてのビジョンを協働して探究することです。もう一つはその動きに高校生や大学生に参加してもらい、地元の教育を支える若い世代の裾野を広げることです。

シンポジウム当日の様子は、山形大教職大学院のホームページをご覧ください。

11月1回掲載します

やまがた教員養成シンポジウムの一環で実施した高校生と大学生の合同ゼミ
11月10日